

## 2017年度 産業研究所

愛媛県松山市まちづくりプロジェクト in 大阪府堺市

参加学生 報告書



関西学院大学 産業研究所

## ■プロジェクトの概要・目的：

2016年11月に産業研究所から3名を派遣した、「松山まちづくりプロジェクト (in 松山)」を、2017年4月、大阪府の堺市で開催します。

松山市では、古くから本土との結節点として栄えた「三津浜地区」を活性化するために、三津浜地区ブランド化プロジェクトを進行させており、中でも、名物である「三津浜焼き」を通じた三津浜地区のPRに力をいれています。

地域の課題である、①三津浜ブランドを確立すること、②集客イベントを行うこと、を目的に、地域資源である三津浜焼きを活用した「こなもんサミット」の開催をはじめ、地域と学生が連携し、新しい地域のブランドを作っていこうと様々な企画を実施しています。

前回の愛媛県松山まちづくりプロジェクト（2016年11月派遣）では、松山市で開催された「こなもんサミット」運営補助や実行委員会へのヒアリングを実施しました。今回は、みなと堺で開催される、大起水産主催の“愛媛うまいもんフェア”へ「三津浜焼き」が出展することとなり、その運営補助を通して、三津浜地区ブランド化プロジェクトのお手伝いをするというプロジェクトです。

## ■活動内容

### ①「大起水産」や「平成船手組」へのヒアリングとレポーティング

三津浜地区ブランド化プロジェクトを牽引されている、三津浜地域の住民団体「平成船手組」の方々に対してヒアリングを実施し、現状の課題、今後のあるべき姿などを模索します。

### 【2016年11月開催のこなもんサミットの様子】



### ②「愛媛うまいもんフェア」におけるボランティアサポート

「愛媛うまいもんフェア」とは…

大阪府堺市の「大起水産」が開催する愛媛県産品を集めた物産展です。プロジェクト参加者は、ボランティアスタッフとして、「愛媛うまいもんフェア」および出展している「三津浜焼き」のPRをサポートします。

## ■日時

日時：2017年4月15日（土）～16日（日）

## ■参加者

文学部女子学生1名（3年生）

社会学部女子学生1名（3年生）

人間福祉学部女子学生1名（1年生）

教育学部女子学生1名（3年生）

## ■参加学生の目標（各自が設定した参加当初の目標）

- ・地域活性化に必要な考え方、方法を知る。人とのかかわりを通して自分の視野を広げる。
- ・前回の愛媛県でのフィールドワークやその後社会学で学んだまちづくりについての知見をふまえて三津浜地区におけるまちづくりの現状と課題を知ること、まちづくりについてより深い学びを得ること
- ・自身の地元である、愛媛県の魅力についてより深く知ると同時に、どのようにして三津浜焼をブランド化するのか、その手段を学ぶ。
- ・まちづくりにおけるPRの仕方や、どうしたら外部の人たちに関心を持ってもらえるかを学ぼう。

## ■実施内容（学生の報告書より）

### <4月15日（1日目）>

- ・三津浜焼きの製造販売、平成船手組の方々との交流
- ・大起水産街のみなと堺本店の愛媛県フェアにおける三津浜焼きの売り込み、ヒアリング
- ・三津浜焼を販売するブースにおいて、呼び込みをしたり、実際に売ったりした。  
ブースを閉めた後は、市場にあるレストランで平成船手組の方や、大起水産の方と交流した。
- ・三津浜焼きの作り方を教わり、実践。夜の懇親会で平成船手組について学ぶ。

### <4月16日（2日目）>

- ・三津浜焼きの製造販売、平成船手組の方々との交流
- ・大起水産街のみなと堺本店の愛媛県フェアにおける三津浜焼きの調理、販売
- ・三津浜焼を販売するブースにおいて、実際に三津浜焼を焼いた。  
ブースを片付けた後は、平成船手組の方たちと交流した。
- ・三津浜焼きをお客さんにPR。宣伝の工夫や言葉のチョイスに気がつけた。

## ■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・平成船手組の方は人柄がよく、松山への愛を感じ取れました。町おこしにはまず、こういう人々の熱い気持ちが必要であり、それこそが多くの人を動かしていくということがわかった。  
三津浜焼きを焼く行程にまで参加させていただいた。そのことにより、材料・焼き方の一つ一つにこだわりがあることがわかり、お客さんも物珍しそうに焼いている行程をみつめていた。愛媛出身のお客さんはお好み焼きを懐かしむ姿も見られ、これがこのプロジェクトの求めている効果なのではない

かと思った。

もともと松山とは縁もゆかりもなかったわたしも、松山を応援したくなったように、平成船手組も活動を見ていたお客さんの心を打って行ったのではないかと思う。

- 三津浜地区のまちづくりの中心として地域活性化の中心として三津浜焼きが選ばれたその理由が安くてうまいことで低価格志向の消費者の集客を期待できるからというだけではなく、昔から地元の人に馴染みのある三津浜焼きを提供する 80 店舗以上あったものが、現在 20 数店舗に減少しており、そして経営者の多くが高齢者という中で、三津浜焼きを守り、引き継いでいこうという平成船手組の方々の熱い思いがあるということを知りました。今回も大阪出店でありながら愛媛産の豚肉「ひめポーク」や紅色のちくわ、削り粉といった地元の食材を使っていることにこだわりを感じ、そしてそれが地元の生産者へ外部の消費者からの資金流入という流れを確立することにつながっていると実感しました。また、「こなもんサミットグランプリ受賞」という謳い文句に引き寄せられるお客さんも多く、前回のこなもんサミット開催の効果の大きさを感じたとともに、消費者心理を利用することで消費者へのアプローチにより大きな効果が期待できるのではないかと考えました。三津浜地区のまちづくりの現状については、北は北海道から南は九州まで、全国各地で三津浜焼きを出店しており、これから継続していくことで三津浜焼きが全国各地に浸透していく可能性があると考えました。また、三津浜地区でもミツハマルというプロジェクトと平成船手組が連携して活動を進めているということで、古い趣のある建物を利用した空間価値の創造・提供といった面でも三津浜地区のまちづくりは進んでいると感じました。
- 今回のプロジェクトを通して、最も大事だと思ったことは、人と人とのつながりです。たまたま平成船手組の方と大起水産の方が知り合いで、市場でブースを出すことになり、たまたま平成船手組の方と市川先生が知り合いで、関西学院大学の生徒が手伝いに行くことになるという本当に人とのつながりがあったからこそ今回のプロジェクトだったのだということがわかりました。そしてそれこそが三津浜焼きをブランド化するための最も重要なことではないかと思います。たくさんの人に三津浜焼きを知ってもらい、有名になり、本場の三津浜焼きを食べに行こうという人が増え、そして愛媛県に足を運んでくれる人が増えるのだと、平成船手組の渡辺さんはおっしゃっていました。本当にその通りだと思います。平成船手組はボランティア集団でした。三津浜焼きとは全く関係のない職業についていながらも、故郷の活性化のために努力している姿は本当に素敵でした。このプロジェクトに参加することで、そのような素敵な方たちとのつながりを作ることができました。
- 三津浜焼きのブランド化を目指し、残していこうと各地で活動する平成船手組の存在を知り、それがボランティア団体であることに驚いた。また、あくまでボランティア団体であるため、三津浜焼きを作ることが本業ではないことは、あの手際の良さや作りっぷりからは想像できなかった。愛媛県を飛び出し、三津浜焼きの存在を多くの人に知ってもらおうと、平成船手組自身が情報媒体となり、発信していることを学び、まちづくりにおいて、このような発信の仕方があることは新たな発見であった。また、ボランティアとして、本業でやっている人たちの代わりに三津浜焼きを作っているの、多少味や見栄えが異なってしまうのではないかと思うこともあったが、三津浜焼きの味や見栄えどうこうという前に、このようなイベントでの出店で、三津浜焼きの存在を知ってもらうことに意味があるのだと感じた。これをきっかけに実際に愛媛を訪れ、三津浜焼きを食べようという人が増えることを願っている。



## ■参加学生が今後の学生生活に活かしたいこと、課題

- ・今回、平成船手組だけでなく、大起水産の職員の方々、他の愛媛を盛り上げようとする団体の方々、卸売市場の方々の暖かさを感じることができ、“人と人のつながり”の大切さ、暖かさを再認識できました。みなさんのいつも笑顔のコミュニケーションから相手を思う思いやりの精神に溢れていた。これからも、“人とのつながり”を大切に、様々な活動に参加して行こうと思う。  
また、一緒に活動した後輩たちもたくさんいろんなことを考え、行動していることが伝わってきたので、私も負けていられないと思い、これから就職活動に励んでいこうとおもう。
- ・代表の渡部さんのお話から、多くのことを学びました。何事をするにあたって、どんな時もいかにその時間を楽しむのが大切だと聞いたとき、自分は楽しんでいただろうか、仕事としてこなしてしまっていたらどうかと一日を振り返りました。今後大学生活があと2年残っている中で、勉強でも、ゼミの活動でも、ボランティアの活動でも、アルバイトでも、どんなことにも楽しさを見出して、その時間を自分のものにして、そしてそこから何かを得たり、周りに良い影響を与えられるようになりたいです。平成船手組の活動はボランティアで行われており、その想いを伺ったとことで、私も上ヶ原ハビタットでボランティアを行っているので、改めて自分たちの活動について考えさせられました。活動に対する目的や想い、情熱を忘れずに原動力としてこれからも行動を起こしていこうと思いました。私は、社会学部で2年間学んできたことで、日本の未来は暗いと思っていまらなかったですが、日本にはまだこんなに熱い想いで地域のためにボランティアで動き回っている人がいるということを実感し、日本の将来に少し希望を感じました。
- ・平成船手組自身が三津浜焼きという情報を発信するツールのような役割であることを知ったことは、私が今行っている熊本震災ボランティア活動において、私たち自身が情報を発信する存在になれることを再認識する機会となった。また、広報チラシやテレビなどの視覚的、聴覚的な言葉だけの情報発信のみならず、「現地の食べ物に触れながら、情報を得る」ことで、印象に残りやすくなると感じた。今後誰かに伝えたいこと、発信すべきことがある場合、どうしたら相手に、より印象深く届けられるか、今回の学びを参考に考えていきたい。
- ・私は就職は大阪でするつもりで、地元である愛媛に戻るつもりはありませんでした。しかし、今回のプロジェクトに参加したことで自分がどれほど地元を大事に思っているかを知りました。今後は微力ながらも三津浜焼きのブランド化に貢献できたらと思っています。具体的には、文化祭において三津浜焼きの出店を出店したり、また今回のようなプロジェクトがあったら参加したいと思っています。そして、今回のプロジェクトを通して人とのつながりがどれほど大切であるかを学びました。この経験を活かし、今後の学生生活においてもっとたくさんの人と出会い、つながりを広げていきたいと思っています。今回このプロジェクトに参加した理由は、ただ自分の地元である愛媛県のイベントであり、愛媛県にいる友人が、平成船手組の方と交流があり今回のことを教えてくれたからでした。このプロジェクトに参加したこと自体がたくさんの人とのつながりの結果だと思うと、今回このプロジェクトに参加して本当に良かったと思っています。今後も、少しでも興味を持つことがあれば、積極的に、そして意欲的に様々なことにチャレンジしていきたいです。

以上